

# 室町・江戸初期における「の」と「が」

——文構造面を中心に——

桑 山 俊 彦

## ◇ 序 論

室町・江戸初期の格助詞「の」「が」を考察するに当っては、文構造面、待遇表現面の両面から、その機能・用法を明らかにする必要があることは、既に拙稿<sup>(注)</sup>で述べた。本稿では主として文構造面から見た「の」「が」に焦点を絞って考察を進めていきたい。格助詞の「の」と「が」は、細かく考えれば、それに接続する語や用法に違いが見られるけれども、機能的に共通する部分が多い。

歴史的に見ると、中古・中世には、主格用法として「の」「が」がともに用いられていた。それが現代語では、いわゆる連文節中の主格用法の「の」を除けば、主格用法は専ら「が」が担い、連体格用法は専ら「の」が担っている。このように機能の分担が大きく変化する。室町・江戸初期はその変化が激しく、近代語へと日本語が変貌する過渡期の様相を明瞭に示していると考えられる。

私は、「の」と「が」が文中における機能の面で共通すること

が多い点に着目し、「の」と「が」の機能分化の様相を、相關関係として把えてみたいと考える。

扱う資料は次の六種である。

(註) 資料の示し方は、④資料名、⑤成立時期、⑥刊行時期、⑦所在の順である。

(1) ④天草版伊曾保物語

⑤文禄二(一五九三)

⑥。京都大学文学部国語学国文学研究室編

。今泉忠義編(桜楓社)

(2) ④中華若木詩抄(十七行古活字版)

⑤元和寛永頃(一六一五—一六四三)

⑥東洋文庫蔵

(3) ④きのふはけふの物語

⑤寛永初頃(一六二五—一六三〇)

⑥岩波大系「江戸笑話集」所収

(4) ④虎清狂言本

⑥正保三(一六四六)奥書

③ 古川久編「狂言古本二種」所収

(5) ④ おあんばなし

⑥ 正徳・享保十年頃まで「一七一―一七二五」

⑦ 高知県立図書館山内文庫蔵「鍋山日抄」巻二十所収

(6) ④ 心中天の網島

⑧ 享保五「一七二〇」初演

⑨ 岩波大系「近松浄瑠璃集 上」所収

このように、資料一つ一つの性格が全く異なる点、大いに疑問が残ると思われる。しかし、いわゆる近代語成立期の上方系の資料を用いるとなると、似通った性格の資料を求めるのは容易でない。

しかし、それはともかくとして、論証する際は、各資料をそれぞれ独立した扱いにし、まず資料毎に問題点を説明するように努めた。そうした上で、各資料の性格を十分考慮に入れつつ、室町・江戸初期における「の」と「が」の問題点をまとめるようにした。

ところで、論点を明確にするために、各資料において、次のような場合の用例は省いた。

- (i) 同格の用法の「の」
- (ii) 「ごとし」にかかる「の」「が」
- (iii) 「やう」にかかる「の」「が」
- (iv) いわゆる準体助詞の「の」「が」
- (v) 並列の用法の「の」

(注) 拙稿「室町・江戸初期における『の』と『が』——待遇表現面を中心に——」

「文芸と批評」第三巻第九・十号(昭和47年8・12月)所収

◇ 本 論 主格・連体格用法の「の」と「が」

(1) 天草版伊曾保物語

Aインボが生涯の物語略

(註) ① 種別欄の「地・会・心」は、それぞれ地の文・会話文・心中思惟文の略である。他の資料も同様である。

(四) 書翰中の用例は便宜的に地の文に含め外数で示す。他の資料も同様である。

機能 種別		主 格	連 体 格	計
の	地	8	122 4(書翰)	
	会	18	161	
	心	0	8	
小 計		26	295	321
が	地	49 1(書翰)	13	
	会	51	22	
	心	3	3	
小 計		104	38	142
計		130	333	463

(イ)問題にする「の」「が」は、原文の該当箇所の下線を引き、更に翻字した文の該当箇所を○で囲んだ。この扱いは、B イソボが作り物語の抜き書でも同様である。なお、翻字は京都大学編のテキストに拠った。

(ロ)用例の所在は、使用したテキストのページ数(丁数)・行数によって示した。

(ハ)「天草版伊曾保物語」は、資料の性格上、特に「イソボが作り物語の抜き書」などは寓話であるため、各種の動物を擬人化して、人間と同じように会話をさせている。その点を考慮し、動物もすべて人間に準ずるものとして同じ扱いにした。

## ①主格用法の「の」と「が」

### (i)主格「の」

地……8例はすべて従属句。

会……18例中独立文1、従属句17。

会話文中に見られる独立文の用例1例は、引用文中という極めて独立の度合いが低い例である。このことから、主格用法の「の」は、「イソボが生涯の物語略」には見られないと言って差支えないと思われる。

### (ii)主格「が」

地……49例中独立文6、うち1例は独立の度合いが低い。従属句は43例。書翰の1例は従属句。

会……51例中独立文27例、うち6例は独立の度合いが低い。従属句24例。

心……3例中独立文1、従属句2。

合計104例中独立文中に34例、従属句中に70例という割合になり、主格用法としての地位を確立していることがわかる。

少し細かく見てみると、地の文では、独立文の例が6/49、従属句の例が43/49という割合であるのに比し、会話文では、独立文が27/51、従属句が24/51という割合である。このことから、104例をまとめて見れば、主格用法としての地位を確立していると言える。その中でもやはり会話文の方が地の文に比べ、遙かに自由な使用状況が見られる。これは注目してよい事実であろう。

(iii)主格用法の「の」「が」をまとめてみると、「の」はすべて従属句中における用法に限定されていると言って差支えないが、それに比して「が」は、地の文・会話文で、その程度に差はあるけれども、独立文・従属句を問わず自由に使用されるに至っている。

## ②連体格用法の「の」と「が」

### (i)連体格「の」

用例数では、地の文126例(書翰の例を含む)、会話文161例であるから、特に差は認められない。

### (ii)連体格「が」

「の」295例に比較して、38例と用例数が1/8である。まずこの点だけから、連体格用法としては圧倒的に「の」の用例が多いことがわかる。次に細部に検討を進めていきたい。

「が」の用例38例は、地の文・会話文・心中思惟文を問わず、すべて人に関する名詞に接続している。例えば、

1. Sorenijotte xujinuo fajimete fobaino Elopoga funbetrno

tochorono mina fometato mōlu.

(それによつて主人を始めて傍輩もイソボ<sup>②</sup>分別のところを皆讃めたと申す。)  
〔地 四一三六七〕

②Cocuvō Elopou yeirā atte: fatemo cacaru miguruxij  
yatcuğa xoyvomotte Samono monodomo vaga meiuo  
lomutacato vōgini icaxeraretareba.

(国王イソボを敬覧あつて、さてもかかる見苦しいやつ<sup>③</sup>所為をもつてサモの者ども我が命を背いたかと大きに怒らせられたれば、)  
〔心(王・ケレツソ) 四二九六八〕

1. が人名に接続した例、2. が等三者に接続した例である。

その接続の内訳は、人称代名詞に23例(一人称は22例)、第三者に15例という割合である。このように、すべて人に関する名詞にしか接続しないことは注目すべきことであらう。これに対して「の」の方は、人関係の名詞に接続する割合が、295例中65例であることを考え合せると、特に「が」の用法の狭さが明瞭になる。

③まとめ

「の」「が」の主格用法・連体格用法をまとめて考えてみると、主格用法としては「が」の地位が確立し、主格用法としての「の」は従属句中にしか用いられないという、極めてはっきりした結果が示された。

一方、連体格用法としては、「の」の地位が確立し、「が」は人関係の名詞にしか用いられない。更にその中でも、一人称の人称代名詞「我」「身」「某」「我ら」に接続する例と、人名「イソボ」に接続する例とを合せると、38例中35例の多きを数える。このよ

うに、連体格としての「が」は、現代語ほど狭くはないにしても、かなり限定された用法であることが知られる。

B イソボが作り物語の抜き書

①主格用法の「の」と「が」

(i) 主格「の」

機能 種別		主 格	連 体 格	計
の	地	69 1(書翰)	250 5(書翰)	513
	会	25	141	
	心	4	18	
小 計		99	414	513
が	地	107 1(書翰)	15 1(書翰)	228
	会	45	45	
	心	3	11	
小 計		156	72	228
計		255	486	741

地……69例中独立文0、従属句69。書翰は従属句。

会……25例中独立文2、従属句23。

心……4例中独立文0、従属句4。

合計99例中、従属句中に97例を占めるので、ほとんど従属句中にしか用いられないと言える。しかし、独立文中に2例、会話文

の中に見られることは注目される。その例を挙げてみる。

1 Aru varambe fitujini cufano cōte yaga, yayamofureba  
cuchizufamini vōcameno quru zoto fagebu fodon, flobito  
atcumareba, famonōte cayeru coto tabitabini voyōda.

(或る童羊に草を飼うて居たが、ややもすれば口号に「狼の来るぞ」と叫ぶほどに、人々集れば、さも無うて帰ること度々に及うだ。)

[会(童→人々) 四八九べ19]

この例は、恐ろしい狼がやって来ることを人々に伝えようとする場面で「の」が使用されている例である。しかしすぐ後に続く地の文中で、

Mata arutoqi macotoni vōcamega qite, fitujino curōni  
yotte,  
(又或る時真に狼<sup>②</sup>来て、羊を喰ふによつて、)

[地 四八九べ21]

とあるように、客観的な描写の中では同じ狼に「が」が使われている。この例と「の」の使用されている例を考へ合せてみても、用例1における「の」の使用はうまく説明できない。

2 Aru fai arini catatte yūua: (略) nantaru yoi fage,  
mezuraxij facanato yūtemo, izureca vareraga teuo  
cagenuuo xocufuru ftono aru?

(或る蠅蟻に語つて言ふは、「(略)何たる良い酒、珍しい肴というても、いづれか我らが手を掛けぬを食する人の有する?」)

[会(蠅→蟻) 四五七べ24]

これは疑問文中に用いられた例である。独立文中の例であるが、

「の」の使用は、疑問詞「いづれか」との関連が考えられる。従つてこの例も、無条件に独立文中の用例と見なすことはできないと思う。

1. 2に挙げた例を除くと、他はすべて従属句中のものである。

(ii) 主格「が」

地……107例中独立文13、従属句94。書翰は独立文。

会……45例中独立文16、従属句29。

心……3例はすべて独立文。

合計156例中、独立文中に33例(書翰の例を含む)、従属句中に123例という割合になる。主格法としては確立されていると言えるが、「イソボが生涯の物語略」の主格用法の「が」が、104例中独立文が34例であるのに比べ、その程度はやや低い。

地の文と会話文を比較すると、独立文の中の「が」は会話文に多いことが明らかである。

(iii) (i) から、「イソボが作り物語の抜き書」においても、主格には「が」が用いられ、「の」は例を挙げた2例を除き、99例中97例が従属句中に用いられ、機能を分担した様子が顕著である。

② 連体格用法の「の」と「が」

i) 連体格「の」

用例数を見ると、地の文に250例(書翰を除く)、会話文に141例となっており、地の文に多いことが目立つ。また、主格「の」と「が」においても地の文の方が用例数が多い。ただ連体格用法の「が」だけが、会話文の用例数が多いのであるが、その内訳は、一人称の人称代名詞——例えば「わが」「身が」——が

多用されることは十分理解できる。

以上を考え合せてみると、「イソボが生涯の物語略」と異なり、「イソボが作り物語の抜き書」は、前者に比べ会話形式が少なく、地の文を中心とした寓話から構成されていることが明らかになる。

従って、地の文中に、主格の「の」「が」、連体格の「の」が多数を占めるということは、「の」「が」の本質に関ってくる問題ではなく、むしろ資料そのものの性格に関する問題であると言える。

## (ii) 連体格「が」

「の」414例に対し72例と用例が約1/6である。これだけでも「の」の圧倒的優勢が明らかである。次に細かい検討に移ろう。

全用例数72例は、すべて人に関する名詞に接続している。更にその内訳は、一人称の人称代名詞に接続したもの46例、その他26例である。二人称・三人称の人称代名詞に接続したものがわずかだが見られる。

## ③ まとめ

「の」「が」の主格用法・連体格用法をまとめてみると、主格用法としては「が」の地位が確立し、「の」は99例中2例を除き従属句中にしか用いられないという機能分化の様相が明らかである。

次に連体格用法では、「の」はさまざまな名詞に接続し、完全に連体格の機能を担当していることがわかる。一方「が」は「の」に比べ、用例数自体少ない上に、全用例が人に関する名詞にしか

接続しない。更に過半数の用例が一人称の人称代名詞に接続する例であり、かなり限られた用法に至っていることを示している。

## (2) 中華若木詩抄

いわゆる抄物と呼ばれるものは、上級者が下級者に講義する形式をとっているわけであるが、この「中華若木詩抄」にしても、地の文・会話文・心中思惟文という区別を設けるのはすこぶる困難に思われる。そこで私は、この資料に限りそういった区別をしなかったことを予めお断りしておきたい。

機能 \	主 格	連体格	計
の	429	2796	3225
が	780	199	979
計	1209	2995	4204

## ① 主格用法の「の」と「が」

### (i) 主格「の」

429例中、独立文に26例、従属句に403例の割合であり、独立文中の用例数は26/429、つまり6に%すぎない。更に詳細に見てみると、26例中、④次に続く文が指示代名詞や連体詞で受けているも

の、④引用文中のもの、に分けた場合、④としては、

1. 華清宮ニテ酒筵ニ色ヲ「色々ノ」の誤刻か? 遊ヒ〇アル  
其ノ中ニモ風流陣カ面白ソ

〔一36オ〕

のように、すぐ後に続く文が「その」というような連体詞で前の文を受けている形式がある。この種の用例は、例えば、

2. 其野菜ウエテ居ルモタモノハセス天下英雄ノシワサヨ蜀ノ  
劉備ナント〇セラレタ也只今衰翁カ毎日鋤ヲニナウテ菜園ヲ  
スルヲ笑ヘカラス

〔一28ウ〕

のように、完全な独立文中の用法と見なされるものよりは、独立の程度が低いと考えられる。④に含められるものが3例ある。

次に④引用文中の用法の例がある。例えば、

3. 春鳥ノ鳴ト云事ハ定タル事ナレハイカントモナラヌ事也

〔四35ウ〕

のように、「ト」という（こと）という語形にまとめられる用例である。これも、一つの文を全体的に考えてみると、やはり独立度の低いものと言えよう。④にまとめられるものが7例ある。

以上、④⑤を合せると10例、これが26例中に含まれているわけである。従って、完全な独立文中の用例としては、結局16例にすぎないことになる。

次に、その16例をもう一度考えてみることにする。この中には、④人名に接続したものが8例、⑤人に関する名詞に接続した例が5例ある。

④の人名に接続したものとしては、例えば、

4. 九州トハ夏ノ禹ノ洪水ヲ治テ天下ヲ九州ニワラレタ也吾宗門

ニモ重於九鼎者アルヘシ

〔二2ウ〕

5. 項羽〇秦ヘ打入テ咸陽宮ナントヲ焼テ財宝トモヲ奪取テ大ニ  
富貴ニナラルソ

〔二38オ〕

のように、国王もしくはそれに準ずる者に下接する例がある。いづれも待遇との関りの中で把握すべきものである。

次に、⑤の人に関する名詞に接続した例としては、

6. イツクノ御曹司ヤラン色白ク見メ貌モヨキ少年〇馬躍ランテ  
来ル也

〔三22ウ〕

7. 与ノ字一字テ此詩ヲ見ヲトリタルト古老〇評セラレタルソ

〔三41ウ〕

のような例がある。6.は「御曹司らしき少年」に下接した例であり、7.は「古老」に下接した例である。ともに待遇面からも考え合わせるべき用例と言えよう。

④⑤を通じてみると、④においては国王もしくはそれに準ずる地位の者に対して「の」が用いられ、⑤においては知識の豊富な老人や貴人の子息に「の」が用いられている。主格「の」の独立文の用例中に、人に関する名詞に接続する用例が多くを占め、かつ、その「人」は身分も高い人である。⑤の6.以外は述語に尊敬表現を伴っている。

このことから、独立文中での主格「の」の衰退という状況の中でも、尊敬表現を明確に打出すことが必要と考えられる場合は、「の」が用いられる、と言えるのではないか。勿論、この問題に結論を与えるには、文構造面・待遇面の両面から主格「の」「が」を検討した上でなければならぬ。ここでは問題を提起しておく

に止めたい。

(ii) 主格「が」

全用例780例中、独立文に399例、従属句に381例、ほぼ同数になったのは単なる偶然であろう。独立文・従属句を問わず自由に使用されていることがわかる。

これらの中で、主格「の」と関連をもつ、人名に接続した用例が、「の」の場合と少し異なった様相を呈しているので、少し述べてみたい。主格「が」で、人名に接続した用例は780例中107例を占める。およそ1/7であるからかなりの量になる。

まず、「が」との比較のため、「の」の用例を少し検討してみた。主格「の」では、国王もしくはそれに準ずる者に対して「の」が用いられる傾向がかなり明瞭であることは既に指摘した。例えば、孔明ハ臥竜也南陽ノ草廬ニ堅臥シテイタレトモ蜀ノ先生劉備  
②三度マテ行テ請シタレハ出テ天下ヲ佐クルソ〔三41オ〕  
のように使われる。

さて、「が」の方に目を向けてみよう。

8. 劉備ノイマタ曹操ニ帰服シテイラレタ時ニ曹操④近臣ヲツカ  
ワシテ(下略)〔二27ウ〕

この例では、劉備には「の」を用い、その上「イラレタ時ニ」と尊敬表現まで見られるのに対し、曹操には「が」を使用している。曹操については「中華若木詩抄」ではすべて「が」を用いている。一国の支配者でありながら、すべて「が」が用いられる点は注目してよいと思う。

また、「中華若木詩抄」に採用された詩人、例えば、李白・陶淵

明・蘇東坡などには、独立文・従属句を問わずいずれも「が」が使われている。

ところで、同一人物に対して「の」「が」が用いられた例がある。9. 両軍退テ闔廬其キスニテ病テ死ナントスル時ニ太子夫妻ニ遣言シテ云ワルルコトハ越王勾踐④余カ父ヲ殺シタルコトヲ忘ルヘキカト云ソ〔二23オ〕

この例は、呉王闔廬と越王勾踐がいくさをし、闔廬が指を負傷し、その傷がもとで息を引取ろうとする時に、自分の息子の夫妻に遺言するところである。こういう場面であるから、敵の大将对しては「が」を用いたことは容易に理解できる。次に、越王勾踐に「の」を用いた例を示そう。

⑤サシモココハ越王勾踐④榮華ヲキワメラレシ処ナレトモカヤウニアトカタモナクナリハヘタタ程ニ(下略)〔二26オ〕

この例は、越王勾踐が榮華を極めた遺跡を詩人が訪れ、古を偲んでいる場面である。従って、「が」が用いられた9.とは全く立場が異なる。⑤では国王としての勾踐に対しているのであり、9.では敵将に対してであるから、9.に「が」を用い、⑤に「の」を用いた意図は十分理解できるところである。

②連体格用法の「の」と「が」

(i) 連体格「の」

「の」「が」を合計した連体格用法の用例は、「中華若木詩抄」の中で2995例を占める。そのうち「の」は93.4%、「が」は6.6%という割合である。しかも「が」は、1例を除きすべて人に關する名詞に接続するものである。「が」の用法がこのように狭く限



定されたものになっているのに対し、「の」が量的にも質的にも連体格用法をほぼ完全に担っていると言って差支えないであろう。

「の」は2796例中、人に関する名詞に接続する例が304例で、連体格用法の用例中一割強を占めるにすぎない。いずれにせよ、あらゆる名詞に接続しつつ、文中で連体格用法を担っていると言えよう。

## (ii) 連体格「が」

図表の合計欄を見ると、主格・連体格を合せ、「の」「が」の総用例数は4204例になるが、そのうち連体格用法の「が」はわずか199例にすぎない。これは百分率では4.7%である。一方、連体格の「の」は66.5%になるので、量的にも「が」を圧倒していることになる。

連体格「が」の総用例数199例のうち198例が人に関する名詞に接続する。そしてそのほとんどが、一人称の人称代名詞と人名に接続するもので占められていることも注目すべきであろう。

上に述べたような傾向は、「天草版伊曾保物語」、「きのふはけふの物語」などとも共通するものであって、「中華若木詩抄」だけの特徴ではないようである。

詳しくは、待遇面を中心にした前稿で述べたが、連体格用法の「が」が、ほとんどすべてと言ってよいほど、人に関する名詞にしか接続しないという限定された用法は、この時期の大きな特色と言えよう。現代語では、人名に接続する形式もなくなり、ただ一人称の人称代名詞に接続する形式(例・「わが国」「わが家」)が慣用的に固定化されて残存するばかりであるが、ここに掲げた資料は、その一段階前の様相を明瞭に示していると言えよう。

## ③ まとめ

「中華若木詩抄」における主格・連体格用法の「の」「が」について、用例を挙げつつ述べてきた。全体的に見れば、他の資料と異なる結果は見られないと言えよう。その中でも一、二注目したいのは、主格用法の「の」のうち、独立文中の用例で、「の」に上接する名詞が人関係である場合が非常に多いことが指摘できる。これらの用例については、文構造面からの検討だけでは十分なように思われる。「が」の用例を考え合せつつ、待遇面からのアプローチをそこに併用することが必要だと考えられる。

## (3) きのはけふの物語

### ① 主格用法の「の」と「が」

機能 種別		主 格	連 体 格	計
の	地	33	173 2(書翰)	
	会	31 3(諺)	192 7(諺)	
	心	1 3(歌)	8 20(歌)	
小 計		71	402	473
が	地	18	5	
	会	83	13	
	心	0 1(歌)	0 3(歌)	
小 計		102	21	123
計		173	423	596

(i) 主格「の」

地……33例中独立文5、従属句28。

会……31例中独立文4、従属句27。

心……従属句1例。

諺と歌の例を除く65例中、独立文に9例、従属句中に56例という割合になる。

「の」が従属句中に占める割合は $\frac{56}{65} (86.2\%)$ と、その優勢は動かないが、独立文中に9例も見られることは注目すべき現象である。例えば、

1. 又、ばうずのすずばちにて、なますをあゆる所へ人の来る。  
にはかにかくす事はならず、あたまの上にきつといたただひて、  
〔上・地 六七べ〕

のように独立文であり、また独立の程度も高いことが認められる。

また、9例のうち6例までが人に関する名詞に接続すること、待遇表現との関りを感じさせるものと言えよう。

(ii) 主格「が」

地……18例中独立文6、従属句11。過渡的用法<sup>(註)</sup>1。

会……83例中独立文51、従属句30。過渡的用法2。

心……0。

会話文での使用状況を見ると、83例中独立文に51例、従属句に30例と、独立文の多いことが目につく。全体的には、歌の例を除く101例中、独立文に57例、従属句に41例という割合である。このように、独立文・従属句の区別なく自由な使われ方が見られる。

これを「天草版伊曾保物語」と比較してみると、「イソボが生涯の物語略」「イソボが作り物語の抜き書」がともに従属句中の用例が多いのに対し、「きのふはけふの物語」は独立文中の用例数が、従属句中のそれを上回っている。

② 連体格用法の「の」と「が」

(i) 連体格「の」

地の文・会話文の用例はほぼ同数である。連体格「が」と比較すると、「の」402例に対し「が」21例であり、およそ20対1の割合である。しかも「が」の方が、21例すべて人に関する名詞にしか接続していないことを考慮する時、「の」が量的にも質的にも連体格用法を担っていることが明らかになる。

(ii) 連体格「が」

用例数21例はすべて人に関する名詞に接続している。詳しく述べてみると、人称代名詞に接続した例が10例、人名に接続した例が5例（歌中の例を含む）、その他の名詞に接続した例が6例という内訳になる。人称代名詞の例はすべて一人称の人称代名詞である。

これに比べ連体格「の」は、402例中人に関する名詞に接続した例は101例であって、それ以外の名詞が多数を占めている。「の」に上接する名詞が多彩であることから、「が」の用法が限定されたものであることがわかる。

③ まとめ

主格・連体格用法の「の」「が」は、全体的には、既に述べてきた「天草版伊曾保物語」「中華若木詩抄」における様相と異な

るところはないと言えよう。

しかしながら細部では、例えば主格用法の「の」で、独立文中の用例が、「天草版伊曾保物語」ではやや特殊な場合に限られるのに比べ、「中華若木詩抄」や「きのふはけふの物語」にはかなり見られる、というような違いが見られる。

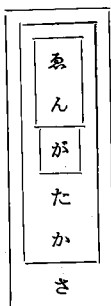
そのような違いが、単なる偶然に因るものか、それとも資料の性格の違いからもたらされるものかは、違いそのものがかなり微妙であり、量的にもわずかであるために、結論を下すには慎重を期したい。

(注) 一応主格として扱ったが、連体格とも考えられる用例を指す。例えば、

となりのおめうさい、こしをかがめよろほひきて、「やれやれめでたひ」とて、あがらふとしても、あん<sup>㊟</sup>たかさにあがりかねて、「これのはこあんがないほどに、あがられてこそ」といわれた。  
〔下・地 一三七六〕

のように、「あんが」の「が」は「たか」にかかっていると考えられる。「あんがたか」全体を接尾辞「さ」が受けていると見なすことができる。

ところが、「が」を連体格と見ることができないわけではない。つまり、「が」は「たかさ」にかかると見るわけであるが、私としては先に述べた考え方が穏当であると考える。これを図式化すると次のようになると思う。



この考え方が、会話文中の2例にもあてはまると思う。

- (4) 虎清狂言本  
① 主格用法の「の」と「が」  
(i) 主格「の」

地……0。

会……69例中独立文16、従属句53。

心……歌中に5例。

機能 種別	主 格	連 体 格	計
の	地 0	13(ト書き) 3(書翰)	
	会 69	331	
	心 0 5(歌)	0 8(歌)	
小 計	74	355	429
が	地 0 3(ト書き)	0 2(ト書き)	
	会 177 2 ※	25	
	心 0	0 1(歌)	
小 計	182	28	210
計	256	383	639

(※印を付した2例は、接続助詞ともとれる例である。)

今、歌の例を除いて考えることにするが、主格「の」の69例のうち、独立文中に16例、従属句中に53例という割合になる。他の資料に比べ、独立文中の用例数が多いように思われる。そこで、少し詳しく検討してみたい。

独立文中の16例の中には、次のような例がある。

1. おうちこ② おうちこのちになつたみまいなみまいな

〔やくすい 四九べ下〕

このように、はやしことばと見なされる中に使われている例が8例ある。しかも1.の例とはほぼ同形で、すべて「おうちこ②」 という語形である。独立文中の用例として挙げてはみたが、かなり特殊なものと考えられる。

また、これは、おうち（祖父）が薬の水（若返りの水）を飲んで子供になつてしまったのを、孫たちがはやしたてている場面であり、年長者に対する年下の者からの待遇意識の反映として「の」が使用されたとも考えうる。

次に、引用文中の用例が3例あるので、完全な独立文中の例としては5例にすぎなくなる。例を示そう。

2. あ「さてはそれがし。すいりやういたした事②ある。きのふのとりは。こか〔「古歌」の心をしらいで。ほろろをかけていられたるが。（下略）

〔きんや 三六べ上〕

3. 太郎「たのふた人の手は。よい手じやな

二郎「いや行さきで人②のおほめやる

〔文にない 四四べ上〕

のように使われており、3.は「おくやる」という尊敬表現との関

りを考慮すべき例であるが、ともに独立文の用例と考えられる。

(ii) 主格「が」

地……0（卜書きの例を除く）。

会……177例中独立文74、従属句103。

心……0。

177例のうち、独立文に74例、従属句に103例の割合であるから、独立文・従属句を問わず自由に用いられていることがわかる。

一方、主格の「の」が、「の」「が」の合計246例（注・歌、卜書き、接続助詞とも考えられる例の合計10例を除く）のうち、69例を占め、しかも、そのうち53例が従属句中での用例という偏りがあるのに対し、「が」は177例を占め、主格用法を担うものとして完全に確立されていると言えよう。

② 連体格用法の「の」と「が」

(i) 連体格「の」

連体格用法の「の」は355例見られた。これは「の」「が」の主格・連体格用法の用例を合計した総用例数639例の約55%を占める。全体に占める連体格の「の」の用例数の割合が50%を超えることは、私の使用した資料のいずれにも共通する傾向である。それを百分率で示せば次のようになる。

天草版伊曾保物語（生涯）

天草版伊曾保物語（作り物語）

中華若木詩抄

きのふはけふの物語

おあんばなし

64%  
56%  
67%  
67%  
70%

心中天の網島

70%

資料の性格を考慮すべきとは言え、とにかく55%から70%もの割合を占めることは注目したい。

(ii) 連体格「が」

28例中27例が人に関する名詞に接続するものである。そのうち人称代名詞に接続する例が25例を占める。従って、「が」の用法が極めて限られたものであることは明瞭である。

しかし、ただ1例であるが次のような例もある。

4. 山「何といふぞ。それかしがぎやうりきのほどを。みんなためにでたと申か」  
〔かに山ぶし 四六べ上〕

私の使用した六種の資料を通じて、連体格の「が」で、人関係以外に接続する用例としては、「中華若木詩抄」における「天が下」の1例とこの例だけである。

③ まとめ

全体的には他の資料とはほぼ同様の傾向を示しているが、中には一、二注目したい現象が見られる。主格用法の「の」で、独立文中の例が、全用例数に比して多いが、これらは待遇表現との関りを考慮する必要があるものをかなり含んでいるものと思われる。また、連体格用法の「が」では、「みんながため」という例があることは注目される。他の例がほとんどすべて人称代名詞に接続するという偏りが顕著であるだけに、留意すべき例と言えよう。しかも、私の扱った他の五種の資料でも、「中華若木詩抄」における「天が下」という1例を除けば、連体格用法の「が」はすべて人に関する名詞にしか接続しないのであり、その点からも「虎清狂

言本」のこの例は問題にならう。

(注) 「心中天の網島」には「文字が関」という例があるが、掛詞にもなっており、一語と見なしても差支えないと考えられる。

(5) おあんばなし

① 主格用法の「の」と「が」

(i) 主格「の」

全用例が7例で、それはすべて会話文に集中している。その内訳は、独立文に1例、従属句に6例である。独立文の例は、1. おれか兄さま②おりおり山へてほう打ニまいられたその時ハ朝なめしをたいてひるめしにも持たれた

〔三ウ9〕

機能 種別		主格	連体格	計
の	地	0	8	
	会	7	36	
	心	0	0	
小計		7	44	51
が	地	1	0	
	会	7	4	
	心	0	0	
小計		8	4	12
計		15	48	63

のように、すぐ後に「その時ハ……」と、連体詞を伴って文が続いている。従って、独立文と言っても、その独立の度合いはかなり低いものと言えよう。更に考えられることは、ここはおあんが

自分の兄について語っている場面であり、「まいいられた」のように尊敬表現をも伴っている。つまり、兄への敬意の表示が「兄さまの」「まいいられた」という表現になり、その反映として「の」が用いられたのではないだろうか。

(ii) 主格「が」

地……1例は独立文。

会……7例中独立文2、従属句5。

地の文の例は独立文のものと見なしたが、次に挙げるように述部が不完全なものである。

2. 此ものかたりをしてむかしの事共取あつめ世の中の費をさせ  
へこさかしき孫とも④むかしのおあんへひこねはは今のちさ  
まへひこねちいよ何をおしやるぞ  
[五才五]

このように「へひこねちいよ(といふ)」とあるべきところが、孫の発言のままで終ってしまい、主語の「孫どもが」に対応する述語が流れてしまっている。

一方、会話文では、独立文の例が2例と少ないように思われるが、用例数そのものが少ないので、深く検討することはさしひかえない。

② 連体格用法の「の」と「が」

(i) 連体格「の」

地……8例。

会……36例。

会話文の用例数が地の文に比べて随分多く思われるが、主格「の」「が」、連体格「が」を合せて考えれば、いずれにおいても

会話文の用例が多い。従って、「おあんはなし」全体に地の文の用例が少なく、会話文に多いことは、地の文・会話文の問題ではなく、資料そのものの性格によるのであろう。即ち、「おあんはなし」が、年長者が子供たちに語りかけるという形式をとっていることに因り、必然的に生じた現象と言えよう。

(ii) 連体格「が」

用例数はわずかに4例、いずれも会話文である。連体格「の」が44例なのでその1/11にあたる。しかも4例がいずれも、人に關する名詞、それも一人称の人称代名詞と反照代名詞「おの」に接続している。連体格の「が」が、一人称の人称代名詞と反照代名詞に限られていることは、私の扱った資料の中では注目すべきであらう。他の五種の資料では、一人称の人称代名詞に接続する場合が極めて多いことは指摘できるけれども、一方に、人名に接続する例がかなり多いのである。

これらを考慮すると、用例数が少ないといえ、一人称の人称代名詞と反照代名詞に接続する形しか見られないことは、私の扱った資料の中では現代語に最も近いと言えよう。

③ まとめ

「おあんはなし」は分量が少ないため、「の」「が」の用例も63例しか見られない。量的な不十分さは否めないけれども、個々の用例を詳細に検討した結果は、他の資料とはほぼ同様の特徴を示していることが明らかになった。

わずかの用例数しかない資料では、用例中に特異な例が入り込んでいる場合、その全用例中に占める比率は大層大きくなってし

まう。「おあんばなし」には結果的にそういった特異例は見られなかったけれども、連体格用法の「が」は、他の五種の資料に比べ、はるかに現代語に近い様相を見せていると言えよう。

# (6) 心中天の網島

① 主格用法の「の」と「が」  
(i) 主格「の」

地……6例中独立文0、従属句6。  
会……20例中独立文2、従属句18。  
心……2例中独立文1、従属句1。  
合計28例中独立文が3例ある。例えば、

機能 種別	主 格	連 体 格	計
の	地 6	176 3(書翰)	
	会 20	258 4(念仏)	
	心 2	19	
小 計	28	460	488
が	地 22	13 1(書翰)	
	会 78	34	
	心 14 1(歌)	9	
小 計	115	57	172
計	143	517	660

1. 二年といふものすもりにしてやうやうはさまをち様のおか  
げで。むつまじいめをとらしいね物がたりもせうもの。た  
のしむ間もなくほんにむごいつれないさ程心残らばなかしや  
んせなかしやんせ。其の涙がしじみがはへながれて小はる②  
くんでのみやらうぞ。

〔会(おさん→治兵衛) 三七三べ2〕

のような例である。これは、夫・治兵衛が遊女小春に傾いてしま  
っていて、いつまでも妻・おさんの方に心を傾けてくれないこと  
の恨み、悲しさを夫に訴えている場面である。おさんにとっては  
敵とも思える小春なのに、「のみやらう」と尊敬表現を用い、「小  
春の」と「の」を使用した点に疑問が残る。

しかし、疑問が残るにせよ、とにかく独立文の用例であること  
は明らかである。

## (ii) 主格「が」

地……22例中独立文4、従属句18。  
会……78例中独立文50、従属句28。  
心……14例中独立文9、従属句5。

なお、独立文とした例の中には、述部が不完全なものが3例あ  
る。

総用例数114例(歌の例を除く)中、独立文の用例が63例、従属  
句が51例の割合になり、独立文・従属句を問わず自由に使われて  
いることがわかる。

② 連体格用法の「の」と「が」  
(i) 連体格「の」

用例数460例は、「の」「が」の主格・連体格用法の総用例数660例の69・7%を占める。しかも連体格「の」がわずかに57例で、しかもすべて人に関する名詞に接続していることを考慮する時、他の五種の資料と同様に、連体格用法としては、「の」が量的にも質的にも「が」にまさっていることが明らかである。

460例中、人に関する名詞に接続する例は83例にすぎず、他はあらゆる名詞に接続していて、自由な用法が窺われる。

## ii) 連体格「が」

57例の用例はすべて人に関する名詞に接続している。その内訳は、人称代名詞に22例、人名に19例、その他に16例という割合になり、人称代名詞の中では15例が一人称の代名詞に接続している。

このことから、まず、全用例が人に関する名詞にしか接続していない、という点で、「が」の用法が極めて狭いということが言える。

その他注目したいことは、連体格用法の「が」のうち、一人称の人称代名詞の占める割合が、「中華若木詩抄」のそれとともに、六種の資料中では際立って低いことが挙げられる。ここで各資料の比率を示せば、

### (1) 天草版伊曾保物語

A イソボが生涯の物語略

B イソボが作り物語の抜き書

### (2) 中華若木詩抄

### (3) きのはけふの物語

### (4) 虎清狂言本

22	38	46	72	38	198	10	21	19	27
(57・8%)	(63・9%)	(19・2%)	(47・6%)	(70・3%)					

(5) おあんばなし

3/4 (75・0%)

(6) 心中天の網島

15/57 (26・3%)

のようになる。「中華若木詩抄」及び「心中天の網島」の百分率が30%に満たないが、前者は人名に接続する例が圧倒的に多いので、後者とは同列に扱いにくい。その点、「心中天の網島」の低い比率が目立つけれども、他の用法に関しては、他の資料と大きく異なる面は見られない。

## ③ まとめ

全体的には、主格用法として「が」、連体格用法として「の」の優位性が、量的にも質的にも示されたが、細部ではかなり問題を含むようである。それら問題を含む用例は、人に関する名詞に接続するものが多いようであるが、その分析を行なう際は、待遇表現との関り合いを考慮しなければならない。しかしながら、待遇意識の差違の反映と「の」「が」が対応しない用例がいくつも見られた。そういった例における「の」「が」は、単に文構造上の要請によって「の」「が」が使い分けられているものと考えざるを得ない。「の」「が」の待遇表現面での差が、次第に薄れつつある状況が示されていると言えるようである。

## ◇ 結論

以上、六種の資料に基いて調査した結果をまとめてみたい。まず、私の用いた資料は、一つ一つが性格を異にする点に大きな問題があったけれども、「本論」で述べたように、資料の性格の相違にも拘らず、ほぼ同様の結果が見られた。このことは、資



料の相違が問題にならないほどの大きな流れが、室町・江戸初期の格助詞「の」「が」を覆っていることを我々に示しているのではないだろうか。

本稿では文構造面から見た「の」「が」を中心に述べたが、随所で触れたように、文構造面・待遇表現面の両面から考察する必要がある。それは、過渡期における語法を究明する場合、当然必要になる視点と言えよう。詳しくは前述の拙稿を参照されたい。

次に個々の問題点としては、以下のような諸点が明らかになった。主格用法の「の」は、わずかではあるが独立文中に例を留めている。しかし主格用法の主体は「が」に移っている。一方、連

体格用法では、量的にも質的にも「の」が勝り、「が」はほとんどすべて人に關する名詞に限定されている。このように「が」の用法の狭まりが顕著であるが、現代語の「わが家」「わが国」などのように、一人称の人称代名詞に限られ、しかも慣用的に固定化してしまった用法だけが残存しているのに比較すれば、資料による多少の偏りは見られるにしても、一人称・二人称・三人称の各人称代名詞や、人名・第三者などに接続するなど、まだかなり幅広い用法を保っていると言えよう。

本稿を成すに当り、辻村敏樹先生の御教示を賜った。ここに記して感謝いたします。

（一九七二・一〇・二五）

## 新刊紹介

大久保典夫著

### 『革命的ロマン』

主義者の群れ』

政治と文学との接点、それを啄木から安部公房、大江健三郎までの文学のうちにさぐったものである。その間に中野重治、林房雄、島木健作、小林多喜二、保田與重郎、三島由紀夫等々の文学者達がならぶ。対象はかなり広汎である。しかし広汎であ

るということは、必ずしも散漫であるということを意味しない。大久保氏は前衛的知識人達の文学のその広野に、知識人のうちのマリヤ、すなわち「永遠に守らんとするもの」(現実性)と、聖靈、すなわち「永遠に超えんとするもの」(超越性)との相反したヴェクトルを一つの視座として道をつけている。「ラジカリズムを日常性のなかに置いていかに生かすか」、大久保氏が島木健作の問題性として指摘している言葉だが、それはそのまま大久保氏自身の問題意識としてこの一冊の本に流れている。

政治と文学、ふるくかつ今も難しい問題である。それに対する大久保氏一流の案内書にこの本はなろう。

(昭和四十七年十月刊、三省堂新書、一九二ページ、二五〇円)

〔大屋 幸世〕